

呑川と六郷用水

2017.7.31

・六郷用水とは？

徳川家康が関東に入府してきたのは**1590**年、戦国時代終盤の只中だった。家康は関東とはどんなところか入念に調査したに違いない。7年後**1597**年多摩川の水を狛江から取水して、大田区の広大な**六郷領**の平地へ送る六郷用水と、多摩川対岸稲毛・川崎領を潤す二ヶ領用水を**造り**始めた。3年後、**1600**年家康は関ヶ原の戦をしている。その3年後**1603**年、家康は征夷大將軍に上りつめた。その間六郷用水と稲毛・川崎の二ヶ領用水の開削は農民の手により続けられた。六郷用水と二ヶ領用水の完成は**1611**年、**14**年の歳月をかけて完成した。

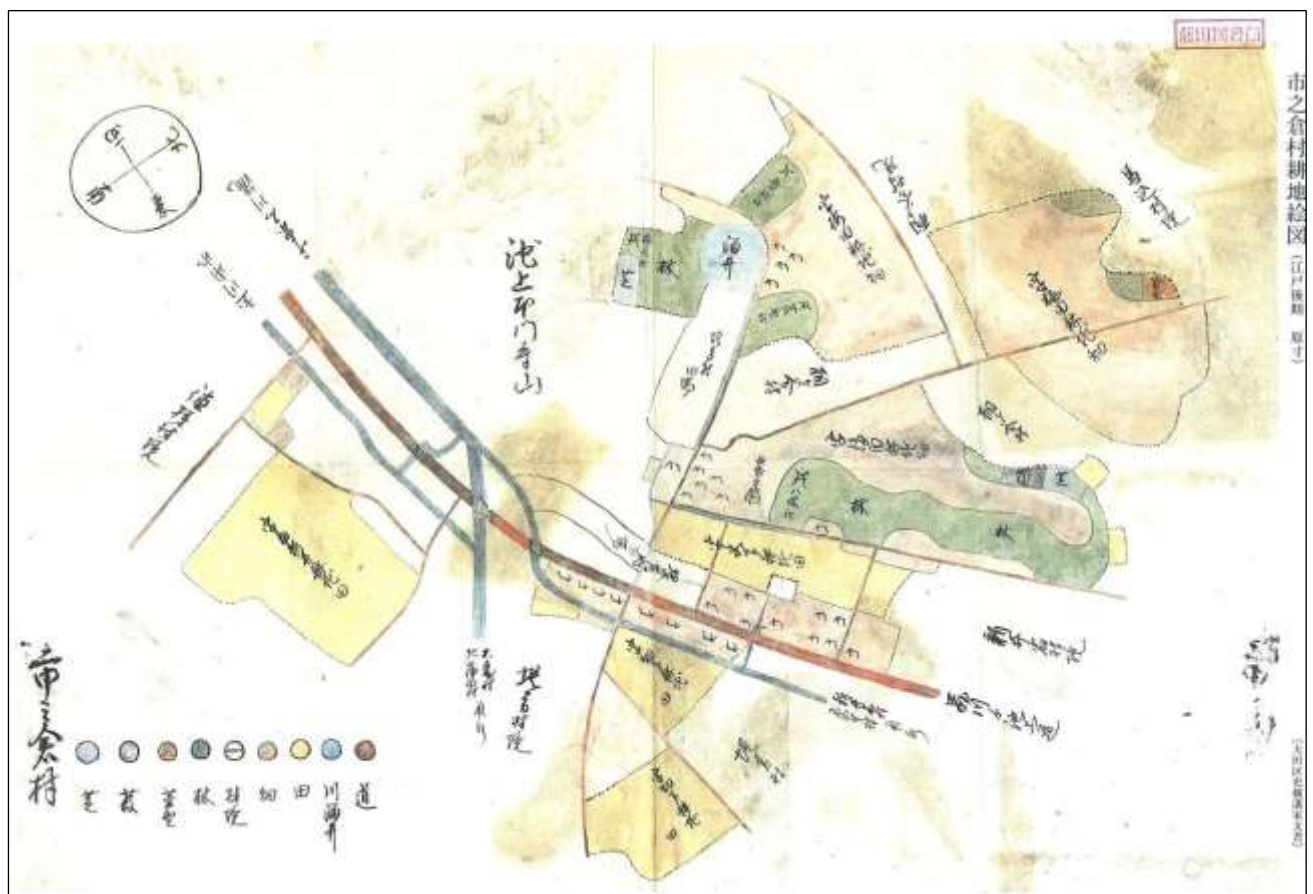
六郷用水が作られる以前、大田区には呑川・内川・池尻川という自然河川があった。これらの水は、川沿いの田畑を潤していたようだが、六郷用水が出来た恩恵がどの位あったかは以前の資料がないため、知ることは出来ない。ただ、膨れあがる江戸庶民の糊口を潤したに違いない。

・六郷用水を辿って見る。

本流は狛江の取水口から世田谷を通過して多摩川の浅間神社下を通り、千鳥町の南北引分迄である。

南堀、千鳥町の南北引分から南の堀を辿ると、環状8号線に沿って東南下して蛸の手に至る。更に分流し糞谷羽田方面を潤した。

北堀は北に向かう用水で、向かう先に**呑川**が流れている。南北引分から千鳥町駅の脇を通り、第二国道を横切り、池上警察署の脇を緑道に添って進むと、北からの呑川と**並行**に流れる。本門寺**参道**を過ぎて八寸の堰にいたる。



① 図は江戸後期の図である。本門寺下の流れは呑川である。この図には「千束石川流れ」とある。また並行して流れる六郷用水は玉川用水となっている。川の呼び名は時代とか、地域とかで変わるものらしい。

今度は②図（現代図）を見てみる。六郷用水を八寸の堰で分流し、呑川に合流して、新井宿方面に流して送る仕組みが描かれている。八寸の堰を越えた分は直進して呑川に合流する。



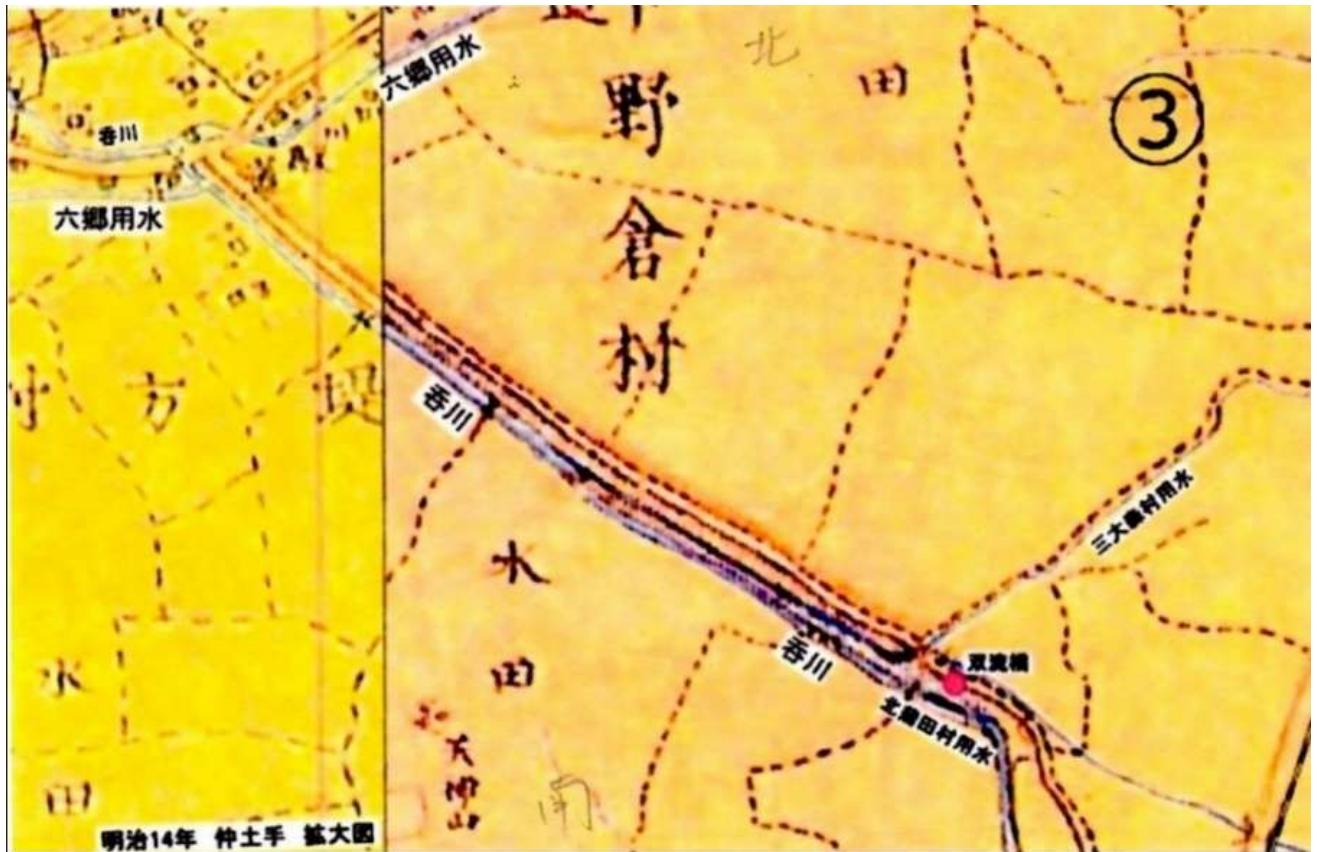
ここで六郷用水北堀は呑川と合流して六郷用水は呑川に吸収されるが、堰上げされ新井宿方面に、六郷用水北堀として流れて行った。蒲田方面に流れる呑川も用水として大切に利用されていた。

③図は明治14年の迅速図である。呑川の中ほどに築かれてあった中土手は、地図の上では見にくいだが、現双流橋上流地点あたりから用水は「三大森村用水」として内川方面へ向かった。

内川は北馬込2丁目辺り（馬込第三小学校辺り）に水源を持ち大田区を縦断し東京湾に落ちる小河川で、大田区生まれの大田区育ちの愛すべき河川である。内川は潮が満ちてくると、塩水が満潮に押しあげられて登って来る。その内川に用水を注ぐと用水

の用を成さなさなくなるので、内川に樋を渡して用水を内川の北側へ渡した。三大森村・新井宿村方面の田畑は大いに潤った。

また香川下流も海からの塩水の洗礼は抗しがたく、夫婦橋上流に堰を造り松葉用水（下袋用水）を分水し糶谷方面に用水として送った。潮の害を夫婦橋の堰で防いでいた。



④図は、明治14年発行迅速図の水路を現在の地図に乗せたものである。

左上から流れてくる赤い線が六郷用水である。北堀は八寸の堰で呑川に合流し水量が増えた用水はエンジ色で表した。格子模様の緑の線は明治の田圃を表している（迅速図中の田圃）。

このように六郷用水と呑川とは、大田区の穀倉地帯には無くてはならないものだった。

地上から消えた六郷用水は今、下水路として利用されているという。用水路は自然の流れを上手く利用して作られていたので下水路にも大いに利用しやすかったであろう。

